

サミュエル・スマイルズ (1812-1904 年)の『自助論』(原題 **Self-Help** / 竹内均訳三笠書房)

私が比較的若い時から志を立てるということに関心を持ったのは、実はこの本との出会いがきっかけだった。実に刺激的な出会いだった。そして、この本から得た知的刺激は、のちの私の生き方の方向を決定づけたと言ってもよいほどである。

『自助論』の自助とは、**勤勉に働いて、自分で自分の運命を切り拓く**ことである。これを現代流に言えば自己実現ということになるだろう。

ともかくも大きい夢を描き、その夢の実現に向けて一生懸命に働くこと。こういう人をこそ天は助け、彼の夢はいつの日か必ず実現する。世の中にこれほど確かなことはない。

その意味では、この世は特別な事故などが無い限り、因果応報・善因善果・悪因悪果の世である。

この本のおかげで、私はイデオロギーの世界、つまり社会主義や共産主義そして軍国主義のような志の選択範囲が狭くなる世界と無縁でいられたのではないかとさえ思っている。

エリートコースに漫然と乗っていればよい時代は過ぎ去りつつある。これからの社会は、自分の志を立てるよりほかに仕方がないんだと悟った人は、時々静かな時間を持って、自分の本音に耳を傾ける習慣をつけたらいい。これはわざわざ何時間も取る必要はなくて、出勤や散歩の途中でもかまわない。そのうちにかすかなつぶやきが聞こえるだろう。最初はその声音は低くても、次第にはっきりと聞こえてくるはずだ。

そして、その声がますますはっきりしてくれば、それを具体的に頭の中にイメージしてみる。そうすると、自分のなりたい姿、あるいはやりたいことを成し遂げつつある自分のはっきりと見える瞬間が来る。

その時、背骨のあたりがゾクゾクするかもしれない。それは自分にひそんでいる潜在能力がうずいているのだ。それは神様からのメッセージであると言ってもよい。「お前の本当にやりたいことはこれだよ」というご託宣に違いない。この神様のメッセージは、ふだんなら見えないチャンスを我々に教えてくれる。

神様のメッセージと反対に、悪魔のメッセージというものもある。志を貫いて実現していく過程で障害、苦痛に遭うと聞こえてくる「俺にはやっぱり無理だ」という不安、畏縮、そして逃避をうながす声である。

悪魔の声に負けて、そこであきらめてしまつては自己実現はない。志を立てたら、普通の人には苦勞と思われることでも、苦勞でないと感じられるかどうか。**志が本物なら、やらざるを得なくなる**。そして、それをやらないでいる苦痛のほうが大きい、という心境にならなければいけない。

「刎頸(ふんけい)の友」; 刎頸は、首をはねること。中国の史記に出ている「その友人のためなら首をはねられてもいい」と言うほどの深いつき合いをさしている。

人間には、**3人の刎頸の友が必要**。師と仰ぐ人、同じレベルの人、自分より下位の人

同じレベルの人=>切磋琢磨できる部分が必要。ライバルなら嫉妬心から自己を高める競争心へ昇華できること。

「ウチも大企業との取引をしているのだが、大企業には確かに、一流の大学を出た優秀な人間がいる。しかし、彼らが独立して事業を興しても、なかなか部下が育たず、苦勞するケースが多いようだ。それは、大企業の社員は、その会社に対する忠誠・忠義があるのであって、上役に対する忠誠・忠義ではないからだ。上司の言うことを聞いたとしても、それは会社に対する忠誠に過ぎない。

しかも、大企業というブランドに埋もれ、人間性に磨きをかけることをしなかったような人間であれば、人望は乏しいであろう。だから、独立しても社員の気持ちをまとめることができず、成功することがむずかしいのだ。

その点、中小企業は、それこそ吹けば飛ぶような存在にしか過ぎないから、社員の忠誠・忠義は、経営者に向かざるを得ないわけだ。私の会社など、まさに中小企業だから、社員からこの経営者となら一緒に貧乏になつてもいい、というくらいに信頼感を植えつけなければならない」

もちろん大企業の社員が、すべて人間性に欠けるなどと言うつもりはまったくないが、やはり大企業という名のブランドに溺れ、**人と人との本当の信用・信頼感を生み出す努力を忘れる人が少なくない**のは否めないだろう。

シビアな話になるが、お互いの経済レベルが同じ水準にないと、「遊ぶ人間関係」は成り立たないのではないだろうか。若いころであればまだしも、年齢を取ってくるに従い、お互いの経済水準が「遊ぶ人間関係」を左右する。

なぜなら、中年以後の遊ぶ関係には、お金を必要とするからである。一方が裕福であり、もう一方が余裕のない生活をしているのなら、およそ「遊ぶ人間関係」を成立させるのはむずかしい。ゴルフや海外旅行などの遊び

を共有しようとするれば、どうしてもお金がかかってしまう。ヒッチハイクの貧乏旅行をしようというならいざ知らず、およそ中年を過ぎると遊びにはお金が必要になるものである。だから、**使えるお金の水準が、友人のレベルを決める**、と言っても多くの場合、過言ではない。

一般的に本をたくさん読んでいる人は、話を聞いていても面白い。一つの話をするにしても語彙が豊富なばかりでなく、比喩表現が巧みで、聞いていて飽きないし、想像力を刺激してくれる。

それから、読書というのは物事について、さまざまなアングルから多彩な理解を試みる手助けをしてくれるわけで、これは仕事にとっても有益である。こうしたことは、「**発想の乱反射**」とでも言うべきものである。

そして「**乱反射的な発想**」は、通常の仕事に直接的に役立つことはないが、その代わりに**人間としての魅力や機知**を磨く上では抜群の効力を発揮する。会話の仕方にしても、企画書などの文書の書き方にしても、一味も二味も違いが表われて、自分という人物の評価を高めることができるであろう。

おすすめの準古典

日本のもの

『努力論』（幸田露伴、『人生、報われる生き方』のタイトルで渡部編述、三笠書房）
『修省論』（幸田露伴、『得する生き方損する生き方』のタイトルで渡部編述、三笠書房）、
『心』（夏目漱石、新潮社他）、『半七捕物帳』（岡本綺堂、筑摩書房）、
『ふおん・しいほととの娘』（吉村昭、新潮社）、『序の舞』（宮尾登美子、朝日新聞社）、
『細雪』（谷崎潤一郎、中央公論新社他）、『汜濫』（伊藤整、新潮社）、
『三陸清左衛門残目録』（藤沢周平、文藝春秋）、『軍閥興亡史』（伊藤正徳、光人社）、
『坂の上の雲』（司馬遼太郎、文藝春秋）、『言志四録』（佐藤一斎、講談社）、
『三国志』『太閤記』（吉川英治、講談社）

西洋の古典では次のような書を挙げたい。

『知的生活』（P.G・ハマトン、渡部・下谷訳、三笠書房）
『知的人間関係』—P・G・ハマトン、渡部・下谷訳、講談社）、
『白助論』（サミュエル・スマイルズ、竹内均訳、三笠書房）、
『自分の時間』『自己を最高に生かす!』（アーノルド・ベネット、渡部訳、三笠書房）、
『西洋の没落』（オズワルド・シュペングラー、五月書房）、『幸福論』—カール・ヒルティ、白水社他）、
『人間この未知なるもの』（アレキシス・カレル、渡部訳、三笠書房）、
『余暇と祝祭』（ヨゼフ・ピーパー、講談社）、『隷属への道』（フリードリヒ・A.ハイエク、春秋社）
「考える力」が必然的につく読書法

中国のものでは、もちろん『論語』を挙げたい。また、『史記』や『十八史略』も挙げないわけにはいかないだろう。

『論語』は、言うまでもなく孔子の没後、門弟などが、孔子と弟子などとの問答、弟子たち同士の問答、孔子の性行などを収録した書である。国際的な古典と言ってもいいだろう。『論語』は、人間社会をどう生きたらよいかという洞察に満ちており、今さらながら究極の人生論であるとの印象を強くした。

『史記』は、司馬遷が書き著した歴史書で、中国の伝説の時代から漢帝国の初期に至るまでの人物、政治、経済、文化、制度の歴史を記述している。旅行家として彼が見聞した中国各地方のさまざまな事実、伝承、今で言う講談の類までも材料にしている。庶民の息吹を知る上ではたいへん貴重なものであるし、古代中国の社会の一面を伝えてくれる。しかし膨大なものであるから、『十八史略』でよいでしょう。

『十八史略』は元代の人、つまり十二世紀から十四世紀にかけてのモンゴル人の王朝時代の人である曾先之（そうせんし）が撰者だ。堯（ぎょう）、舜（しゅん）の時代から南宋の時代までの『史記』『漢書』以下、歴代の正史十八史をダイジェストした、中国史概論といった趣のものだ。エピソードも豊富で、ぜひ一読してみてほしい。

谷沢永一

『悪魔の思想』（クレスト社）；

スターリンが昭和七（一九三二）年に日本共産党に発したコミンテルンのテーゼがある。いわゆる「三十二

年テーゼ」と呼ばれる、運動方針書である。世に知られているとおり、このテーゼは日本の明治維新以降の歴史をコテンパンにけなしている。そして、戦後日本の進歩的文化人たちは、このテーゼに抵触しないようにと、日本の歴史をあしざまに言うような文言を発表したものである。共産革命が起こっても粛清されないようにとの配慮からである。

ところが谷沢氏はある時、ふと「ほかの国々にも似たようなテーゼが出されたのだろうか」と疑問を抱いた。そこで自分の書庫に行って、コミンテルンの資料集を見てみたというのである。すると、コミンテルンが存続した時期に、日本のほかにテーゼが出されたのはラテンアメリカだけだったとわかった。しかもラテンアメリカ向けのテーゼが一回きりだったのに比べ、日本向けには十五回ほどテーゼの類が出されていたのであった。

これは谷沢さんの大発見と言えよう。つまり、その国の文化や歴史に対して悪口を述べているのは日本へのテーゼだけだったということである。そこにはスターリンの日本への恨みもあったらしい。第二次大戦後にスターリンが「これで日露戦争の敵は取った」と一言ったという有名な話もある。

『人間通』

幸田露伴；

彼の人生論をまとめたものが『努力論』なのである。そのテーマを簡単にまとめて言うと、次のようなことになる。

「努力している、また努力しようとしている、という意識を忘れて、そして自分がやっていることが『自然な努力』であってほしい。これこそが努力の真髄であり、醍醐味なのである」

『努力して努力する』これは真によいものとは言えない。『努力を忘れて努力する』これこそが真によいものである」

「努力には『直接』と『間接』の二種類がある。『直接の努力』は当面さしあたっての努力、その時その時に力を尽くすこと。『間接の努力』は日頃の準備の努力、基礎をつくる努力である。ある願望を達成しようとして努力しても成果があがらないのは、『直接の努力』ばかりでふだんから『間接の努力』をしていないからだ」

「失敗したら自分の努力の足りなかったせいにし、成功したら運のおかげにする、そういう人物こそ偉大である」

「幸福三説」；

幸福は幸運に置き換えられる。人生に幸運を呼び込むためには、どういうことが必要か。露伴はその方法を3つ紹介するのである。

「惜福」；福を惜しむのがよい、というのである。これはどういうことか。惜しむとは、儉約とかケチとか、そういったことではない。大切にすることである。すなわち、「自分が幸運に出会った時は、それを大切にすること」なのである。

この惜福をビジネスマンの世界に当てはめるとどうであろうか。私が思うに、「幸運にいい気になって、舞い上がらないこと」であろう。上役に褒められたり認められたりした時に、天狗になってはいけないのである。露伴は「控え目にして、自ら抑制するのは惜福である」と述べている。

「分福」；福を分ける。すなわち、「幸運に出会ったら、それを周りにお裾分けすること」が大事だということである。「商売で儲かった時に、この店主が利益を使用人らに分けたとしよう。すると使用人らは、店主が福利を得るならば自分たちも福利を得るのだということがわかり、熱心に業務に励み、店主を儲けさせようと努力するものなのである」

「植福」；文字どおり「福を植える」ということである。狭い範囲で言えば、植福は家族や子孫の繁栄を願うものである。

「植福とは、自分の力・情・智をもって、人の世に幸福をもたらす物質・清趣・知識を提供することを言うのである。すなわち、人の世の慶福を増進長育するところの行為を植福と言う」

今日の言葉にすれば、個人が自分の能力などを用いて社会に貢献することになるわけである。自分の福を社会のために植える。自分には寿命があるが、人の社会は自分の死後も続くであろう。その社会の繁栄のために、自分の福が役立つような行為をするのが植福なのである。

真向法(まっこうほう)；4つの体操を組み合わせる健康法。渡部氏は67歳でも、股を開いて臍から顎まで床につけることができる。真向法で体を動かしていなかったら、とてもそんなことはできない体になっていた。

退職後に"輝いている人たちの秘密

それから、ビジネスマンが自律的な時間を創造できるか否かは、**仕事以外に「志」がある**かどうかが決め手となる。これはもちろん、本職としての仕事をおろそかにするという事ではない。

他律的な時間としての仕事に情熱を傾けることができるからこそ、自律的な時間の価値がわかるからだ。自分の仕事も満足にこなせないようでは、自律の時間に何をしようとも、真に有益なことはできないに違いない。この仕事以外の「志」は、本職をリタイアしてから輝いている人を見れば理解できるだろう。

渡部氏；私自身、専門以外の分野でもたくさんの本を書いている。その「志」の原点について紹介しておこう。

ドイツへの留学から帰国した昭和三十年当時、実用的に外国語ができる人は、きわめて少なかった。そこで、外国からの要人が来日すると、通訳の依頼が舞い込む。私はドイツ語と英語ができ、しかも若かったために頭の働きも今と違って敏活だった。口も今よりよく廻った。

政府関係者や偉い人の依頼でその通訳を引き受けるのだが、なぜかむなしくなってしまう。それは、通訳をするたびに「日本を代表するような偉い人なのに、この程度のことしか言えないのか・・・」と強く思うようになったからだ。

だったら、私自身も積極的に主張し、世の中にアピールしたい。そんな思いが募るようになった。私自身の「志」が芽生えてきたのである。この「志」を維持したために、専門以外の分野でも多くの本を書くようになったと思っている。

特に私は、戦後に発言がタブーとされた分野である、第二次世界大戦を中心とした日本の歴史に興味を持ち長く追究してきた。

百冊の本を読むより、はるかに実り多い"対話"がある

情報の収集ということを考えた時に、私が今最も重視するのは、**尊敬する知人との対話**である。自分と対等、あるいは自分以上に知力のある人で、しかも専門の分野で傑出した人。そういった人たちとお茶を飲んだり食事をしたり、あるいは座談でもすることができれば、これは甚大なる利益を得ることができる。

人生の”三種の神器”；よき師、よき友、よきコネ

通俗的ではあるが、よき師、よき友を選び、いいコネを持つ。それが結局、いい情報を運んでくれるのであり、人生を豊かにするのである。

50代の終わりからラテン語の暗記！(頭脳鍛錬も兼ねて)

再び意を決し、五十代の終わりからラテン語の習得に本格的に取り組んだのである。まず、ラテン語で書かれた三百ページほどのアングロサクソンの法律集の暗記を試みたのだが、これには三、四年を要した。それを二度繰り返した。その後は前に書いたフランシス・ベーコンのエッセイで、これにはたくさんのラテン語の引用がある。それを全部抜き出し、覚えたものだ。

そして、今取り組んでいるのがギリシャ・ラテン引用語辞典のラテン語の部分なのである。およそ八百ページくらいのものだが、これを暗記しようと頑張っている。このラテン語の暗記で発見したことがある。それは百七、八十ページほど進んだところから、急に暗記のスピードが速まったことである。

つまり、記憶力は年齢に関係がないということではないだろうか。現実には、六十八歳を過ぎた私の記憶力は格段に高まっている。タクシーやハイヤーなど車の中で覚えるのだが、はじめのころに比べ、数倍の速さで暗記できるようになっているのだ。

私が暗記にこだわるのは、「知力の根幹は暗記力」と確信しているからである。

「インテリジェンス」と「インテレクト」

私の父は田舎で育ったこともあり、高等教育は受けなかった。しかし、雑誌などをたくさん購読していたので、知識は多かった。ところが母は本などまったく読まない。私は本をよく読み、できれば本を書くような人生を送りたいと思っていた。それが、どうも本をよく読む父のような人間がちっとも利口に見えなくて、

本を読まない母が利口だと認めるのは、あまりよい気持ちがいなかったのである。

私は新制の大学院の、最初のころの卒業生で、最高学府を出たと言っていいだろう。だが、留学の数日前に私よりも母のほうが知力が上だと感じたのは、どうも落ち着かない気分だったのである。

知には2種類ある。「インテリジェンス」と「インテレクト」と呼ばれるものである。

インテリジェンスとは、ダチョウとかニワトリなどのような、足で走れる知識。インテレクトとは、ワシやツバメのような空中を突っ切って飛ぶことのできる知識。人間の知力にもこの二種類あって、地に足のついたような知力と、空を突っ切って飛ぶような知力があるのではないか、とハマトンは言うのである。

本多静六博士

収入の四分の一を貯蓄に回し、せっせと蓄財に励み、ついには巨富を築いた学者である。蓄財に対する堂々たる態度、そして蓄財したものの見事な使い方、実に立派である。

そもそも本多静六先生とはどういう人か。

本多先生は、慶応二(一八六六)年、埼玉県の片田舎に生まれた。十一歳で父親に死なれ、農業や米揚き(こめつき)の仕事しながら苦学、十九歳で東大農学部の前進である東京山林学校に入学した。だが、入学したはいいが第一学期の試験に落第、それを悲観して自殺を図った。井戸に身を投げたのだ。ところが、である。思わず片手で井戸の枠をつかんでいた。何しろ米揚きで鍛えた腕力である。楽々と身を支え、どうしても死ぬことができなかったというエピソードを残している。

ここで本多先生は一念発起する。一心不乱に勉強に励み、優秀な成績で卒業してドイツに留学、学位をとって、わが国最初の林学博士になっている。帰国して東京帝大農学部の助教授になったのは、二十五歳の時だった。日本の林学の父とうたわれ、その業績は『本多造林学』といった著書三百七十冊になり、国立公園事業に尽力するなど、多大の功績を残した。だが、これで本多先生という人を語り尽くしたことはない。東京帝国大学教授として教鞭を執るかたわら、せっせと蓄財に励み、やがて東京・淀橋区(ほぼ現在の新宿区)の最高多額納税者になるほどの巨富を築いたことを忘れるわけにはいかないだろう。そこにこそ、本多先生の面目は躍如としているのである。

本多先生は昭和二十七年に亡くなられた。享年八十六であった。明治以前に生まれた人としては、たいへんな長生きである。亡くなられるほぼ一年前、本多先生は「これまでたくさんの本を書いてきたが、それらとはまったく異なった本を書く」として、一冊の著作をものした。それが、私が大学院生であった二十三、四歳のころに手にした『私の財産告白』である。

本多先生がこの本に込めた意図は序文に明らかである。

「今ここに長い過去を省みて、世の中には余にも多くの虚偽と欺瞞とご体裁が満ち満ちているのに驚かされる。私とてもまた、その世界に生きてきた一偽善生活者の一人で、今さらながら慙愧(ざんき)の感が深い。しかし、人間は八十五の甲羅を経たとなると、そうそう嘘偽りの世の中に同調ばかりもしておられない。偽善乃至儀悪の目をかなぐり捨てて真実を語り、本当の話をしなければならぬ。これが世のため人のためにもなり、それが我々老人相応の役目であると考え」

そして本多先生はこう語っている。

「特に財産や金儲けの話になると、今までの社会通念においては、いかにも金儲けの話は心事陋劣(ろうれつ)のように思われ易いので、本人の口から正直なことは言えないものであるけれども、金の世の中に生きて金に一生苦労し続けるものが多い世の中に、金について真実を語るのが少ないのも、皆にそう思われるからである。

しかし、やはり財産や金についての本当のところは、世渡りの真実を語るには必要欠くべからざるものであるから、もっとも大切な点をぼんやりさせておいて所謂処世の要訣を説こうなどというのは、およそ矛盾である」

そこで、お金について自分のすべてを語る、ということで書かれたのが、『私の財産告白』なのである。すでに絶版になってしまったのだが、実際、この本の中で本多先生はお金についてざっくばらんに語っている。そこには一点の偽りもないように思われる。だからこそ、この本は格好の人生手引書にもなっているのである。

私はこの本を読むことによって、はじめてお金というものの本当の姿がわかった。私もすでに古稀に近い年齢になったが、振り返ってみると、これから本格的に人生のスタートを切ろうという二十代の前半にこの本に出会ったことは、本当にありがたかったと思う。私はこの本に書かれているお金についての考え方に共感し、影響を受けた。今の私がこのような姿でいられるのも、この本を読み、お金というものをしっかりと認識できたおかげである、と思わないわけにはいかない。

深遠な哲学書を読むよりも、実生活にはるかに役立つ名著と言うべきである。

前述したように、本多先生は父親に早く死なれ、貧乏で苦勞した。それだけに、貧乏から脱却することが人生の第一歩になるという思いは強かった。そして、ひそかに蓄財の方法を立案していたのである。それは収入を得るようになったら、その四分の一は有無を言わずに貯蓄し、残り四分の三で生活するという計画である。

・・・

この『私の財産告白』を読んだころ、つまり昭和二十年年代の後半、私は貧乏だった。もともと、貧乏ではあったが屈辱はなかった。周りの誰もが貧乏だったからである。

しかし、やはり貧乏は苦痛だった。貧乏から脱却しなければ、精神の独立も生活の自立もあり得ないと説く本多先生の教えは、身に沁（し）みてわかった。それだけに、貧乏から逃げようとしてはだめだ、貧乏を退治するのだと説く本多先生の論には、どんと背中を押されたような心強さを感じたものである。

それにしても蓄財というのは、本多先生の本を読むまでもなく、最初が大変だというのは定説化している。それだけに、やろうと決意して取りかかるまでがたいへんむずかしい。

だが、本多先生はこの問題には苦もなく答える。理屈もへちまもない。腹をくくってやり始めればいいのだ、と。

私が若いころ、本多先生に負けず劣らず影響を受けたヒルティは、その著書『幸福論』の中で、仕事について、とにかくやり始めることが肝心だと力説している。何ごとであれ、物事のはじめはとにかくやることが肝心、というのは真理なのだろう。

・・・

本多先生はせっせと貯蓄を続けた。すると、どうなったか。本多先生は書いている。

「必要なお金は持つがよろしい。欲しいお金はつくるがよろしい。お金というものは雪だるまのようなもので、はじめのうちはほんの小さな玉でも、その中心になる玉ができると、後は面白いようにどんどん大きくなるものである。これは誰がやっても同じことである」

まさに至言である。蓄財は誰がやっても同じ結果になるのではないか。これがお金というもののポイントだろう。金融不安が広がり、低金利下にある現状では、「どんどん大きくなる」というのはむずかしいかもしれないが、蓄財し続ければ増えていくのは当然だろう。

さらに本多先生は続ける。

「お金のあるところには、またいろいろ知恵が出てくる。そしていよいよ面白い投資口も考えられる。こうなるとすべては独りでに動きだし、やたらに金が増えて増えて、我ながら驚いた」

投資となると、貯蓄とはまた別の次元の話になる。しかし、お金ができてくると、投資のアイデアもふくらむらしい。本多先生も株に投資して儲けている。

本多先生は安田財閥の主・安田善次郎と昵懇（じっこん）で、株は彼の影響を受けたようである。安田善次郎の株のやり方は「六分売りの八分買い」が原則である。利回りが六分以下になったら売り、八分以上なら買いというわけだ。今ではこのやり方は適用できないが、当時はなるほど理にかなったやり方だった。

本多先生は株が買値の二割増しになったら、どんなに値上がりが見込めても直ちに売り、儲け分は定期預金に入れるというやり方に徹した。ほかには、株価が二倍になったら持ち株の半分を売る、ということもやっている。これで一度も損をしていない。大したものである。

ともかく、「やたらに金が増えて増えて、我ながら驚いた」と本多先生は記しているが、いったいどれぐらい増やしたのか。

二十五歳で蓄財を開始して、四十歳の時には大学からもらう給料よりも貯金や株の配当の利子のほうが多かった、と述べている。当時の東京帝国大学教授の給料は、今の東大教授のそれと違って、決して少なくない。かなりのものである。それよりも貯金や株式配当の利子のほうが多くなっていたのだ。

定年が間近になったころには、所有する田畑山林一万町歩、住居別荘六カ所、貯金通帳の残高は五百万～六百万円となっていた。ちなみに、当時は一軒の家が一千～二千元で建ったのである。五百万～六百万円が現在のいくらになるのか、計算は容易だろう。

塵も積もれば山となる。積小為大。この言葉に嘘はない。

・・・

本多先生は巨富を築き上げた末に、幸福とは何ぞや、という問いにたどりつく。本多先生の幸福の規定は明快で簡潔である。

「結局、幸福とは自分自身の努力と修養によって勝ち取って感ずるものである」

これが幸福である、というわけだ。そして、人生で最も大切なものは何かを、次のように言い切っている。

「**一生涯、絶えざる精進向上の気魄。努力の精神。そしてこれを生活習慣にしみ込ませること**」

財産はその結果である、と言うのである。そして意外なことに、蓄財してみた結果、幸福にとってお金は大切なものではなかった、とも言うのである。

と言って、決してお金を否定しているわけではない。世俗的成功の基本はやはりお金だと言うのである。経済的生活が独立していなければ、いかなる成功も世間は成功と見てくれない、と説く。お金は幸福そのものではないが、幸福であるためには欠かせないものだ、と説くのである。

お金を蓄えようとする、ともすればケチと言われる。だが、お金が貯まり実力がつけば、ケチと言われた人でも気前のいい人に変ずる。逆に気前がいいと言われ、一生ピーピー過ごす人もいる。

本多先生は前者を取ったのであり、これが本当の生き方ではないだろうか、というわけである。

そして、本多先生はさらに言う。

「貧乏などは一時のものである。蓄財を心がければあれこれ言われるが、そんなことには耳を貸すな」

「目をつむり腰をかがめて一目散に走り抜ければ、目先の煙に巻かれてまごつくようなことにはならず、そこを突破して弾みがつく生活になる」

「金を馬鹿にする者は金に馬鹿にされる。財産を無視する者は財産権を認める社会に無視される」

これほど実際的で含蓄に富む处世訓を私は知らない。

本多先生の处世の見事さは、蓄えた富の使い方を見れば、さらにはっきりする。本多先生は蓄えた富のほとんどを、国立公園運動などの公共のために使った。

・・・

本多先生は『私の財産告白』の最後に、簡潔に人生の要諦を記している。本多先生の生き方を背景に置く時、実に味わい深い言葉である。日く、

「人生即努力。努力即幸福」

アーノルド・ベネットも言う。

「何よりもまず、生活が成り立つということが仕事をする前提であり、またそうあらねばならない。生活が成り立ってこそ、喜びを持って立派な仕事もできるということだ」

お金があつてこそ、凡人も知的生活を楽しめるのである。